

論文

「日本語表現学」の授業における 他者との相互作用を生み出す知識集約型レポート課題

池田 史子¹、久保田祐歌²、小林 良彦³

要 旨

「日本語表現学」の授業では、他者との相互作用によって分野横断的知識を集約し、自身やグループの判断を論理的に組み立てて表現することを目指している。本稿の目的は、当該授業のなかで、学習者が多面的・総合的視点を獲得するためには、レポート課題をどのようにデザインすべきかについて考察することである。授業では、「ジグソー法」と呼ばれる協調学習の型が用いられる。ジグソー法の型において、知識を交換し、折り合いを付けながら討論を行うことで、知識の集約のレベルが、「集合」「結束（相互依存）」「融合」と深化する。知識集約のレベルを「融合」にまで到達させて、そこから新しいアイデアを創発し、次の学びへと発展させることができるように、レポート課題をデザインする必要がある。

キーワード：日本語ライティング授業、ジグソー法、知識集約型レポート課題

1. 研究の背景と目的

現代社会は、VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) とも表現されるように、あらゆる分野において、将来の予測が困難な時代である。そのような時代であっても、人々がより良い未来を創造し生き抜いていくためには、多様な専門分野の人材が知識を出し合い、他者との相互作用によって集約し、新しいアイデアを創発していくことが求められる。

知識集約の場面で重要となるのは、現代社会を俯瞰する多面的・総合的視点である。その視点は、メタ認知力を働かせて思考プロセスを意識化しつつ、分野横断的知識を他者との相互作用によって集約し、自身やチームの判断を論理的に組み立てて表現することを繰り返す日本語ライティング授業によって獲得することができる(池田・畔津・川島2014、久保田・池田2015)。他者との相互作用を促進する役目を果たすのが、Agency (変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力)である(白井2020)。

従来、日本の大学における日本語ライティング授業では、文章構成、形式、文法や表現等に偏った指導が根強く、個人作業によるものが多かった。しかしながら、近年、グループにおける討論やピア・レビューを採り入れた日本語ライティング授業も徐々に展開されつつある(大島2005)。本稿で採り上げる「日本語表現学」もその一例である。

本稿では、「ジグソー法」と呼ばれる協調学習の型を用いて、学習者が主体性を発揮しながら、他者との相互作用によって知識を集約する活動を採り入れた日本語ライティング授業について報告する。そして、そこで用いられる分野横断的レポート課題における知識集約レベルを分析することで、多面的・総合的視点を育成するための日本語ライティング課題をどのようにデザインすべきかについて考察する。

2. ジグソー法の開発と展開

ジグソー法は、1971年頃、異民族からなる子供らが互いに協同することで隔たりを解消することを目的と

1 山口県立大学国際文化学部 2 関西福祉科学大学社会福祉学部 3 大分大学教育学部

して、エリオット・アロンソンらにより開発された。その方法とは、課題文をパラグラフで区切り、各6人で編成した「エキスパートグループ」に分割して渡すというものであった。学習者は、自分に割り当てられたパラグラフについて責任を持って理解するために、エキスパートグループ内で予習し合い、調整し、理解を深める。その後、学習者は異なるエキスパートが集まった「ジグソーグループ」を結成して、互いに情報を教え合う。あらかじめ、全体についての知識を授業の終わりにテストすると告知し、不足する知識を埋めるために互いに頼らざるを得ない状況を設定することで、学習者が全体を学ぶために貢献し合うことが不可欠となった (Aronson & Patnoe2011、昭和女子大学教育研究会誌2016)。

アロンソンらのジグソー法は、1990年頃から、アン・ブラウンらのFCL (Fostering Community of Learners) において展開された (Brown1992、白水・三宅・益川2014)。メタ認知という概念の提唱者の一人であるブラウンらは、実験室ではなく実際の教室の中で、認知過程についての仮説を確かめる研究を行った。その方法は、ひとつのテーマについて、グループの数のサブテーマを設定し、学習者は担当のサブテーマについて調査 (研究) を行った後、他のグループに教えて知識を共有する協調学習であった。

ブラウンに影響を受けた三宅なほみらのジグソー法は、1999年頃から、「知識構成型ジグソー法」として、初等中等教育から高等教育まで、教室のなかで「建設的相互作用」を引き起こす仕掛けとして使用された (白水他2014、三宅・東京大学CoREF・河合塾2016)。学習者に課題を提示し、課題解決の手がかりとなる知識を与えて、その部品を組み合わせることによって答えを作り上げる協調学習の「型」のひとつである。ここでは、Step.0 問いを設定する、Step.1 自分のわかっていることを意識化する、Step.2 エキスパート活動で専門家になる、Step.3 ジグソー活動で交換・統合する、Step.4 クロストークで発表し、表現を見つける、Step.5 一人に戻るというステップで進行した。

3. ジグソー法を用いた日本語ライティング授業

第一筆者は、2012年度前期から、大学において「日本語表現学」(主に2年生、30~35名程度)の授業を担当している。当初から、グループ討論によってアウトラインを作成し、その後、個人で作成したレポートを持ち寄ってピア・レビューを行う方式を採用し、全15回の授業のなかで、3~4件の論証型レポート課題を完成させる授業を行ってきた。

授業では、レポート課題に複雑な背景が存在する場合には、グループ討論も複雑になった。そこで、課題に含まれる多面的問題を各グループに分割して(分割されたレポート課題を以下では「ジグソー課題」と記す)、分担して討論を行い、その後、総合的な視点を組み合わせてレポートを完成させることがあった。そのため、翌年から本格的にジグソー法を採り入れるようになり、現在では4件のレポート課題をすべてジグソー法で進行している。

各レポート課題の進行は、①全体で課題を理解し、ジグソー課題に分割した後で、②個人で情報収集し、これから参加するグループ活動への事前準備を行う。③収集した情報をエキスパートグループ内に持ち寄って紹介し合い、資料を補い理解を深める。その後、新しくジグソーグループを結成し、各自が持っているエキスパートの知識を与え合いながら統合し、グループ全体の知識として集約しつつ、課題についてグループの意思決定を行う。場合によっては、この段階で教室全体にグループ

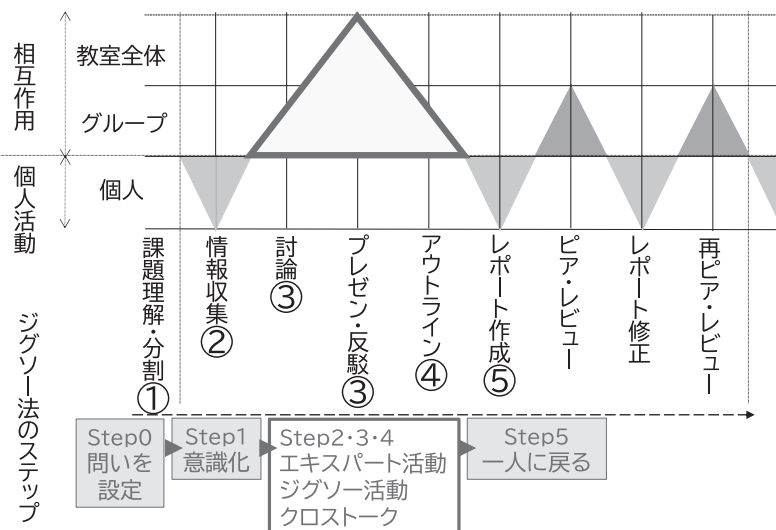


図1. ジグソー法の5つのステップと授業進行の対応(池田他2014を改変)

の決定事項を披露し、反駁を追加することもある。④その結果をもとに、レポートのアウトラインを作成する。⑤最後に、一人に戻って、レポートを完成させ、翌週にピア・レビュー、翌々週に再ピア・レビューを行う。授業進行を、三宅他(2016)の「知識構成型ジグソー法」の5つのステップと対応させると、図1のように、ほぼ同様のステップをたどっている。

4. レポート課題のジグソー課題への分割

「日本語表現学」のレポート課題は、学生の周辺でいかにも起こりそうな話題から始めて、新聞記事やテレビニュースも参考にしながら、学生が興味を持ちそうな時事問題を利用することが多い。課題の複雑な背景を考慮しながらジグソー課題に分割するのは、主に教員であるが、時には学生と相談して授業内で分割することもある。授業で用いたレポート課題から、3件を例示し、ジグソー課題への分割について紹介する。

4.1. 課題A

コンビニエンスストアの24時間営業は必要かということが議論されている。ある新聞が実施した調査によると、「必要でない」は62%で、「必要」の29%を大きく上回った。若年層で「必要」が多数だったのに対し、40代以上になると「必要ではない」が多くを占めている。多様な立場から24時間営業の長所・短所を考慮した上で、24時間営業が必要かどうかについて、1,600字程度で述べよ。
(朝日新聞2019.3.19 朝刊の記事を参考にした。)

働き方改革の話題や地域の福祉問題も絡んだ時事問題で、新聞記事を引用しながらレポート課題を作成した。コンビニエンスストアを日常的に利用したり、アルバイト経験があったりする学生にとっては、身近に感じられる課題でもある。他の課題に比べて複雑ではないので、ワークシートも活用しながら、課題を整理した。この課題は、「日本語表現学」における一つ目のレポート課題に採用することが多い。

この課題Aでは、「オンライン授業を受けている学生」「30代の共働き夫婦」「残業続きで疲れている会社員」「75歳の一人暮らしの近所のおばあちゃん」「家族経営のコンビニオーナー」という異なる立場となって考えることをジグソー課題とした。授業では、それぞれの立場に分かれてエキスパートグループ活動を行った。異なる立場の他者の日常生活への想像力を働かせて、自分とは異なる視点に立つ練習になる。他者の視点に立つことで、多面的視点を獲得することができる。また学習者は、各種データベースにもアクセスして、身近なコンビニエンスストアの話題から、社会情勢を知ることにもなる。その後のジグソーグループ活動では、それぞれの立場となった学習者同士が別々の考えや知恵を少しずつ持ち寄って、パズルのピースのように組み合わせて行き、総合的な視点から24時間営業の是非について考える。

4.2. 課題B

保存状態が優れたマンモスの死骸が発見された。仮にクローンを作成できるとすれば、さまざまな問題と可能性が浮かび上がってくる。この死骸を利用して、マンモスのクローンを作成してもよいかについて、2,000字以内で述べよ。
(朝日新聞2013.5.31 朝刊の記事を参考にした。)

教室に突然「マンモス」が登場してくるので、意外性のある課題である。既存の知識を総動員して、思いつくキーワードを書き出してもらえると、分野横断的なキーワードが出て来る。情報収集後は、現代の科学技術発展が抱える倫理的問題や環境問題にも話題が広がる。

課題Aと同様に、「マンモス・パーク開発会議」「食料危機対策会議」「クローン技術検討会議」「財務会議」「生命倫理会議」という異なる立場(会議)から考えてもらうことで、課題Bをジグソー課題として

分割する。それぞれの立場（会議）に分かれてエキスパートグループ活動を行った後のジグソーグループでは、各会議の委員が集まり、異なる立場（会議）で考えられた「問題と可能性」を持ち寄り、多面的・総合的視点からクローン作成の是非について考えていく。

4.3. 課題C

日本の食品会社が、3年後を目途に、ケニア共和国でインスタントラーメンを販売しようとする計画を立てている。しかしながら、本来、ケニア共和国には麺食文化がないことから、販売までこぎつけるには高い壁が立ちちはだかることが予想される。ケニアでインスタントラーメンを販売する際に注意すべきことは何か。食材、生産拠点、パッケージデザインなど、複数の観点を考慮して、実際に販売する商品を企画しなさい。企画書は、1,600字程度にまとめること。

（朝日新聞2013.5.31 朝刊の記事を参考にした。）

学生たちには身近なメニューである「ラーメン」を採り上げ、自文化理解・他文化理解につなげる課題である。学生たちには、遠い国の状況は不鮮明で、調べてみると実状とはかけ離れた印象を持っていたことに気づく。

課題Cについては、「地理・気候」「貿易・交通」「民族・宗教・文化・言語」「食文化・健康問題・疾病・衛生」「世界の麺食文化・製造法・原材料・栄養」「インスタントラーメンの歴史・原材料・栄養・パッケージ」という異なる側面から考えることをジグソー課題として設定した。エキスパートグループ活動では、それぞれの側面から課題Cについて幅広く情報収集を行う。その後のジグソー活動では、エキスパートグループ活動から持ち寄った異なる側面からの情報を持ち寄り（多面的視点）、対立やジレンマを克服しながら商品を仕上げて（総合的視点）、買い手を意識しながらプレゼンテーションを行ってもらう。時間に余裕があれば、パッケージデザインを行うこともある。

「日本語表現学」の授業では、主にパラグラフライティングの形式による論証型レポート（課題Aや課題B）を書くが、読み手を強く意識する訓練として、企画書形式のもの（課題C）を挟むことがある。このようなアイデア創発の機会は、俯瞰力を獲得しながら、学習者自身が次の学びへと発展させることができる「発展的達成型」ゴールにつながる（三宅2011、白水他2014）。

5. 知識集約レベルのモデル化とレポート課題の分析

ジグソー法によって、複雑な背景を持つレポート課題を分割し、分割した知識を集約させながら新しいアイデアを創り出す場合、情報収集、エキスパートグループへの参加、ジグソーグループへの参加と進行するにつれて、知識の集約レベルが上昇する。そのレベルは、「集合」「結束（相互依存）」「融合」と深化することが想定される。

「集合」とは、個人で情報収集を行い、エキスパートグループ参加への事前準備が完了した者たちが揃った段階である。課題Aで言うと、まずはそれぞれの立場になったことを想定して、コンビニの24時間営業について個人で考えてみるという段階である。未だ文脈や観点を指定されていない知識であって、主に教員によって割り振られた分野や立場についての個別の知識を有している。

「結束（相互依存）」とは、個別の知識をエキスパートグループに持ち寄って、情報を補い理解を深める段階から、ジグソーグループを結成して、各自が有する知識を与え合いながら結びつき、欠かすことが困難になる段階である。同じ文脈や観点同士の知識から、異なる文脈や観点同士の知識の移動がこれに当たる。課題Aの場合、同じ立場のエキスパートグループでコンビニ24時間営業について考え、その後、異なる立場の学習者が混ざったグループでそれぞれの考えを持ち寄ることに相当する。

「融合」とは、ジグソーグループ内におけるアイデアの創発と新しい学びへの発展である。課題Aの場合、異なる立場の学習者たちからの多面的視点を統合し、総合的な視点からコンビニ24時間営業について考える

段階に当たる。

以上を整理すると、表1のようにまとめられる。

表1. 知識集約レベルのモデル化

	集合	結束 (相互依存)		融合
内容	文脈・観点を指定しない 知識集約	同じ文脈・観点同士の 知識集約	異なる文脈・観点同士の 知識集約	結束 and/or 相互依存から の結論
ジグソー法	個人活動：様々な立場に なり個人で考える	エキスパートグループ 活動：同じ立場の人た ちで意見交換	ジグソーグループ活動： 異なる立場の人たちで 意見交換	グループとしての意見 集約・結論発表

6. まとめと今後の課題

本稿では、コンビニエンスストアの24時間営業、マンモスのクローン作成、ケニア共和国でのインスタントラーメン販売というテーマのレポート課題について、ジグソー課題への分割を中心に考察した。

これらのレポート課題は、学生にとって身近な問題であり疑問を抱くことができること、ニュースや新聞記事、小説や映画で触れたことがあるような興味を引くようなテーマであることを意識し開発している。今後も同様の方針を踏襲しつつ、より分野横断的なテーマによるレポート課題の開発を行う。また、近年社会的に注目を集めている「持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)」や「倫理的・法的・社会的課題 (ELSI: Ethical, Legal and Social Issues)」ともリンクさせたレポート課題の開発も検討している。それらを用いた授業実践を行い、再度、レポート課題の分析を知識集約レベルのモデル化と共に行いたい。

また、ジグソー法を用いた日本語ライティング授業において、知識集約のレベルを深化させることができるとすれば、そこに、学習者の主体性を含めた汎用的能力がどのように作用するのかについても、考察を深めていきたい。

謝辞

本研究は、[JSPS科研費20K03126](#)の助成を受けたものです。

本稿は、第27回大学教育研究フォーラムの個人研究口頭発表の内容を再構成したものです。当日にオンラインでご指導いただいたみなさまに深謝申し上げます。

引用文献

- Aronson, E. & Patnoe, S. (2011) *Cooperation in the Classroom: The Jigsaw Method*. London: Pinter & Martin. アロンソン、E・パトノー、S. (2016) 『ジグソー法ってなに？—みんなが協同する授業』(昭和女子大学教育研究会訳)丸善プラネット.
- 朝日新聞(2013.5.31 朝刊)「マンモスの死骸から血液 凍らない謎、解明へ」
- 朝日新聞(2013.5.31 朝刊)「(アフリカはいま)即席麺、ケニアを満たすか 日清、地産地消で自立後押し」
- 朝日新聞(2019.3.19 朝刊)「コンビニ24時間『必要なし』62%」
- Brown, A. L. (1992) Design Experiments: Theoretical and Methodological Challenges in Creating Complex Interventions in Classroom Settings. *The Journal of Learning Sciences*, 2 (2), pp.141-178.
- 池田史子・畔津忠博・川島啓二(2014)「批判的思考態度を育むためのグループ討論を用いた日本語ライティング授業の実践」『日本教育工学会論文誌』38 (Suppl), pp.29-32.
- 久保田祐歌・池田史子(2015)「大学教育におけるクリティカルシンキング—育成課題の検討」『名古屋高等教育研究』15, pp.139-160.
- 三宅なほみ(2011)「概念変化のための協調過程—教室内で学習者同士が話し合うことの意味」『心理学評論』

54 (3)、pp.328-341.

三宅なほみ・東京大学CoREF・河合塾(2016)『協調学習とは—対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業』北大路書房.

大島弥生(2005)「大学初年次の言語表現科目における協働の可能性—チーム・ティーチングとピア・レスポンスを取り入れたコースの試み—」『大学教育学会誌』27 (1)、pp.158-165.

白井俊(2020)『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—』ミネルヴァ書房.

白水始・三宅なほみ・益川弘如(2014)「学習科学の新展開：学びの科学を実践学へ」『認知科学』21 (2)、pp.254-267.

Abstract

A Knowledge-Intensive Writing Assignment that Generates Interaction with Others in a Japanese Language Expression Class

IKEDA Fumiko, KUBOTA Yuka, KOBAYASHI Yoshihiko

In the "Japanese Language and Expression" class, students are expected to consolidate cross-disciplinary knowledge by interacting with others and to express their own and their group's judgments in a logically constructed manner. The purpose of this paper is to discuss how report assignments should be designed in the above-mentioned Japanese writing class in order for learners to acquire multiple and comprehensive perspectives. In the class, a type of cooperative learning called the jigsaw method is used. In the jigsaw group, knowledge is exchanged and discussed while coming to terms with each other, and the level of knowledge aggregation is deepened to aggregation, cohesion, and fusion. It is necessary to design the report assignment so that the level of knowledge aggregation can reach the level of fusion, from which new ideas can be generated and developed for the next learning.